

鹿児島大学水産学部の日本語教育

水産学部 松 田 恵 明
東京外語大学 鮎 澤 孝 子
志学館大学 新 内 康 子
異文化教育研修所有隣館 上 迫 和 海
岩崎言語教育プログラム開発 岩 崎 美 紀 子
水産学部 板 倉 隆 夫

はじめに

松 田 恵 明

現在、水産学部の日本語教育関係で大学院生対象には3つの授業が行われています。大学院修士課程の専門共通科目として、「コミュニケーション論(1年前期2単位)」と自由科目としての「日本語・日本事情Ⅰ(1年前・後期計4単位)」「日本語・日本事情Ⅱ(1年前・後期計4単位)」があります。

はじめて、このような事を聞くと、「なぜ、水産学部に？」という返事が返ってくるかも知れません。そこには、「発想の違い」と「歴史と実績」があるのです。それは私が留学生相談主事になった1983年に遡ります。当時、全学には約74名の留学生がおりましたが、内33名が水産学部に在籍しておりました。水産学部では、国際化の重要性は早くから認められ、国際交流協定を多くの国と結び、留学生やJICA研修生等の受入・派遣に努めておりました。これが1974年に留学生会館が水産学部敷地内に建設された理由でもあります。全国の大学推薦入学者の第1号も水産学部の留学生でした。当時は、留学生に対する日本語の要求は殆どありませんでした。

「留学生政策」を国策として考えているアメリカでの12年間の留学経験をした私は、日本の留学生受入体制の不十分さを当初から痛感していました。当時、日本語教育を担当されていた鮎澤先生がもう一人の留学生相談主事でした。1982年度まで留学生会館に常駐していた倉狩事務官が鹿屋体育大学に転勤となり、これを契機として、留学生会館への事務官配属が打ち切られました。その結果、警察沙汰も含め、現在考えられるありとあらゆる問題がさらけ出されました。私たちは留学生の受入を支援する学内外のボランティアグループに協力を求め、故蟹江元学長を会長にした「鹿児島インターナショナルフォーラム」を設立し、留学生対策に当たりました。当時の石神学長も応援団の一人でした。国際交流委員会では、留学生の受入体制の強化をどうすれば良いか課題となり、私たち2人に説明が求められました。そこで、「留学生の受入に伴う専門教育教官」の概算要求と、大学院生に対する日本語教育の充実方策を訴えました。その結果、1985年に水産学部に「留学生の受入に伴う専門教育教官」1名が配属され、大学院水産学研究科で鹿児島大学全大学院生「日本語・日本事情Ⅰ・Ⅱ」が開講されるようになりました。その後、鹿児島大学の日本語教官席は100%日本語

教育に打ち込める常勤の日本語教育教官席となり、2人に増えました。しかしながら、その教官席は教養部に所属していたために、大学院教育は片手間としか考えられませんでした。その結果、水産学部で開講されている日本語教育プログラムは大学外の非常勤講師に依存せざるを得ない状況が続き現在にいたっております。

1. 「鹿児島大学の日本語教育を振り返って」

鮎澤孝子 (1981-87)

私が鹿児島大学に赴任したのは1981年11月です。前任者の西義郎先生が愛媛大学に転出された後に赴任しました。私はハワイ大学の Department of East Asian Languages and Literature に4年勤務し、日本語、音声・音韻などを教えていましたが、その前は7年間アイオワ大学で日本語を教えたり言語病理学聴覚学科の院生だったりでしたので11年ぶりの日本でした。しかも東京以外の日本の土地で生活するのは初めてでしたので、自然のめぐみの豊かな鹿児島での生活には多くの思い出があります。ところで、鹿児島大学での職務は教養部の日本語・日本事情担当教官でしたが、学部留学生が数名しかいないため、教養部の日本人学生のための英語の授業も担当することになっていました。当時も、大学院には留学生が大勢いたのですが、大学院での日本語の授業はありませんでした。

学部留学生は中国政府派遣の留学生、台湾からの私費留学生、後に、マレーシアからの私費留学生、マレーシア政府派遣留学生等で、教養課程の単位として、日本語・日本事情を履修していました。水産学部、工学部、医学部、歯学部などに進学する留学生ですが、毎年数名のみで、専門課程で困らないように日本語の運用能力を育成することが目的でした。学部留学生の旅行で、屋久島に自転車旅行をしたことが楽しい思い出です。

大学院生や研究生の留学生のための日本語教育は学生部主催の日本語補講がありました。正規授業ではなく、また、昼間、留学生たちはそれぞれの実験で忙しいということで、夕方に留学生会館や教養部の小さな教室で開講していました。留学生の奥様がいっしょに受講するケースもあり、楽しい雰囲気でした。補講を手伝ってくれた日本人学生や、他大学の教官が集まり、日本語教育について勉強したり、語り合ったりする「鹿児島日本語教育研究会」を1984年に発足させましたが、小出詞子先生、曾我松男先生、石田敏子先生が次々に鹿児島まで足を運んでくださり、日本語教授法の特別講演をしてくださったことはうれしいことでした。また、福岡YWCAが中心になって、九州各県、沖縄の大学や日本語教育機関の日本語担当者が集まり、「九州日本語教育研究連絡協議会」が発足し、1985年には日本語教育学会研究例会を福岡で開催するはこびになりました。85年夏から86年夏までは、国際交流基金の派遣でインドネシア大学日本研究学科に客員教授として出かけ、鹿児島を留守にしましたが、この間の日本語補講は安心して研究会のメンバーの方々にお任せできるまでになっていました。86年に帰国すると、水産学部では日本語教育が大学院での正規授業として開講されていて、すばらしい教室も準備されておりびっくりしました。そこで半年、授業をしましたが、残念ながら、87年春から国立国語研究所日本語教育センターに転勤することになりました。

しかし、その後、日本語担当教官が英語教育を担当することはなくなり、定員も2名に増え、現在は留学生センターもでき日本語教育、留学生教育が充実したものになったことは喜ばしいことです。

今後の発展が大いに楽しみです。

鮎澤 孝子 (Tel: 042-330-5351; e-mail: ayusawa@fs.tufs.ac.jp)

2. 水産学部「日本語・日本事情I」

新内 康子 (1986-現在)

1985年4月に水産学部の日本語教育は始まった。大学院留学生対象の「日本語・日本事情」(4単位)がその時開設され、1987年10月に4単位分が追加されて「日本語・日本事情I/II」の2科目となった。私が担当し始めたのは1986年4月からである。二科目体制になってからは「日本語・日本事情I」を担当してきている。

「日本語・日本事情I」では、大学生活を送るために必要な日本語能力の養成を目指している。例年、この授業の受講生の大半は、日本滞在歴0.5～3年、日本語学習歴0.5～4年、聴く／話す能力は初級後半～中級初め、読む／書く能力は初級半ば～初級後半(非漢字圏の場合)である。こういった受講生に対する学期初めのニーズ調査で得られる受講の目的には、「大学内外の日本人や留学生と日本語でコミュニケーションができる」「お知らせや書類や新聞や雑誌や論文が読める」「日本人の生活習慣がわかる」ようになりたいといったことが多い。したがって、本科目では、大学生活における聴く／話す能力の養成を柱にして、語彙力の拡大、読む能力ならびに漢字力の養成に力を注いでいる。

2000年度の受講生は、前期が、水産学部学生11名・工学部学生1名の計12名(ミャンマー4名、インドネシア2名、中国・台湾・バングラデシュ・コロンビア・タイ各1名)であり、その内7名が単位を取得した。後期は、水産学部学生7名・工学部学生2名の計9名(ミャンマー4名、中国・台湾・フィリピン・ベトナム・タイ各1名)で内5名が単位を取得した。使用教材は、前期が『現代日本語コース中級I』(名古屋大学)・『楽しく読もう』(文化外国語専門学校)で、後期が『現代日本語コース中級I』(名古屋大学)・『たのしく読める日本のくらし12か月』(国際日本語研究所)であった。

この授業の問題点は様々あるが、一つ挙げると、受講生が専門の実験／実習やゼミを優先するために欠席・遅刻・早退が多く、日本語学習効果が上がらないことである。開講時間をできるかぎり様々な時間帯に設定してみたが、問題は解決できなかった。初級後半～中級初めの日本語学習において、継続的な学習は日本語能力向上の鍵となる。定期的な授業とティーチングアシスタントやコンピュータなどによる個別指導／学習とを連携させた改善案が考えられるが諸問題が予測され、「言うは易く、行うは難し」である。日本語の必修化の案も考えられるが、これは水産学部が留

学生教育に対する基本理念を打ち出してからのことであろう。

今後も、より多くの留学生が授業に参加できるように心がけ、参加した学習者の日本語の必要性に応えられる日本語授業内容を展開していきたい。

新内 康子 (Tel: 0995-43-1111; e-mail: shinuchi@mail.kwc-u.ac.jp)

3. 水産学部「日本語・日本事情II」

上 迫 和 海 (1999－現在)

筆者が非常勤講師をお引き受けした平成11年度以降の教授活動の中から、特色と思われるものを箇条書きで紹介する。

1) 「海の文化」制作 (平成11年度前期)

留学生が各自の専門について日本語での説明が少しでもできることをめざして、小冊子の作成を行った。内容は、自己紹介、専門紹介、専門用語集の三部からなる。専門用語集では、漢字の読み、英語訳、自国語訳を辞書風に並べた。タイトルの「海の文化」は学生たちによる命名。(参加学生 中国、インドネシア、ミャンマー、コロンビア、アルゼンチン各1)

2) 大学祭での専門研究紹介コーナー (平成11年度後期)

大学祭の中の一室を借り、通りすがりの一般の方々に自分の専門について日本語で説明する活動を行った。聞く人が来てくれるかという心配がはずれ、一日中、家族連れを中心ににぎわった。同じ内容の説明を繰り返すことで、朝と夕方では見違えるほど上達し、留学生にとって「自信になった」というのが一番の収穫であった。(中国、インドネシア、ミャンマー各1)

3) 小学校訪問 (平成12年度前期)

鹿児島市の伊敷台小を訪ね、6年生を対象に専門についての授業を行った。小学校の「総合的な学習の時間」を兼ね合わせたもの。鹿児島県の離島およびプランクトンについての話が、子供たちの興味を強く引いた。準備段階では、プレゼンテーションの方法なども学習項目として取り入れた。のち、原稿集も制作。(インドネシア、アメリカ各1)

4) 修士論文の要旨の日本語訳 (平成12年度後期)

非漢字圏の留学生の場合、大多数が英語で論文を書く。そこで、要旨の部分だけでも日本語に翻訳する作業に取り組んだ。専門に関わる用語については、漢字が読め、聞き取れ、しっかり発音できるよう指導した。(インドネシア1)

5) 日本人学生の参加 (平成12年度前後期)

授業補助者として日本人の学生に加わってもらった。留学生との交流および日本語の教え方の習得を目的とする。授業を活性化させ、変化をつける意味でもきわめて有意に機能したと思われる。(参加学生 法文学部3)

受講生の日本語レベルの幅がきわめて大きいのが本講座の特徴である。今後は、コンピュータおよび授業補助者の有効利用によって、幅広い学習者を受け入れていきたい。

上迫 和海 (Tel: 099-255-3519; e-mail: yuurinkan-uesako@muc.biglobe.ne.jp)

4. 1999年、2000年夏季集中講座の実施報告

岩 崎 美紀子 (1999 - 現在)

1999年と2000年の2度にわたりそれぞれ9月に4日間ずつの集中講義を行った。1999年は、「コミュニケーション論」の一環として、日本語の本質的な特徴および日本語の表現に見出せる日本文化を探ると同時に、その教授法を紹介した。

授業内容例	日本語の文のしくみ
	日本語の数の表現
	助詞の働き
	「あげる」「もらう」「くれる」の使い分け
	口語、敬語表現の使い分け
	日本語教授法

この年は初めての試みでもあり、参加者の見当がつかなかった。結果的に大学院の学生、留学生、外部参加者が入り混じり、しかも留学生はほとんど日本語が理解できない者からかなり理解できる者まで幅が広く、外部参加者も既に日本語を教えている教師とそうではない一般人と様々だった。そのため授業の内容に合わせて、日本語だけ、英語だけ、日本語と英語両方使いながらと、臨機応変に対応する必要があると、全体としては少しまとまりにかけ形になった。

2000年は、前年の教訓を生かし、参加者の対象を日本人および日本語の分かる留学生に絞った。また、「コミュニケーション論」というタイトルに相応しく、日本人同士のコミュニケーションの場に現れる日本的な物の見方や考え方、人間関係の作り方や維持の仕方、そうしたいかにも日本的な部分を認識させる、という内容にした。大学院の学生を対象に考えていたが、予想に反して外部からの参加が大部分をしめ、非常に熱心に受講してもらうことができ、こちらも楽しませてもらった。

授業形態は、参加者を少人数のグループに分け、課題を与えてグループ内で討論させ、その結果を報告、それについて私が講評するという形にしてみた。

課題例	口語、丁寧語、敬語はどう使い分ける？
	「～される」と「～てくれる」はどのようなときに使われる？
	事故がおき、それを報告する場合、どのような表現が使われる？

これらはすべて日本語独特の表現方法に関する課題であるため、こうしたことを改めて考えることによって日本人のもつ独特の文化を再認識することができる。要するに「目からうろこが落ちる」という実感を与えることができ、外部からの受講者に非常に好評だっただけではなく、学生にとっ

ても、このような学習者参加型の授業はめずらしかったようで、楽しかったという感想をもらうことができた。

今年度もまた依頼を受けたので、なにか新しい形を試みたいと思っている。

岩崎 美紀子 (Tel: 03-3584-8291; e-mail : misj@calen.ne.jp)

5. ひとりの理系教官から見た鹿大留学生の日本語教育

板 倉 隆 夫

現在、私の研究室にいるバングラデッシュの留学生は、15年ほど前お世話した留学生（現在バングラデッシュの大学の教授）の教え子です。15年前の留学生は、今も日本語が達者で、一昨年も鹿大を訪ねていただき、今も衰えない日本語能力に驚かされました。それに引き替え、というのも辛いのですが、今いる留学生は、2年以上経つにもかかわらず、「仕事」で日本語を使えるレベルからはほど遠い現状です。これは、来日後、6ヶ月の日本語研修期間を与えられず、来日直後から研究生としての活動と日本語の研修を平行してやらねばならなかったことも起因しています。しかし、留学生が日本語を満身に習得できない「現状」は、それほど特殊なものでもなく、また、将来改善されることもそれほど期待できないと思われまます。それは、次のような「現状」もあるからです。

- 1) 鹿児島大学に留学生センターが設置され、留学生が、来日直後、他大学で日本語学習に専念する機会は無くなった。
- 2) 留学生は、主として専門知識を学ぶために来日しており、日本語を学ぶことに対する意欲は低い。これには、日本が留学先の第一希望であったかどうかとも関係してくる。
- 3) 受入教官も、「研究」には、英語だけで（十分でないかもしれないがそれで）良い、と考え、留学生にもそのように伝える例が少なからずあり、留学生の日本語学習に対するモチベーションは、さらに低くなる。
- 4) 留学機会が広まるにつれ、専門も日本語も両立できるような能力を前提として留学生を教育することが当然とは言えなくなってきた。

このような「現状」を見ると、当然、その現状に合わせた日本語教育を考える必要が出てきます。時間も十分あり、日本語学習に十分な意欲を持った、そのような外国人が相手ではない、ということです。（受講生に十分な時間もモチベーションも無い、ということは、語学教育の一般的悩みでは、あるわけなのですが。）

そのような「現状」の中で、水産学部では、一昨年度より、岩崎美紀子先生を、大学院の「コミュニケーション論」の非常勤講師としてお招きしています。岩崎先生の「MISJ」という教育システムは、東京で、企業などの外国人を24～30時間で日常会話ができるようにするという実績で定評があり、情報教育の分野で著名な慶応大学（湘南藤沢キャンパス）の大岩教授も、日本語教師を短期間で要請するシステムまで完成されているとして絶賛されています。鹿大水産学部の集中講義の

中で、鹿児島在住の多くの（ボランティア的）日本語教師が学ばれましたが、受講生の評価は予想以上に高いものでした。

語学に限らず、教育は宗教ではありません。教育は常に相手があるものです。評価は（短期的、短絡的であってははいけません）結果、つまり、現実の教育効果によってなされるべきものです。一方的主張、現実を見ようとしない思いこみは、教育の場にふさわしくありません。たとえそれまでの実績はあったとしても、常に反省し、客観的に議論する心を忘れず、教育メソッドを向上させる気概を忘れないようにしたいものです。それができれば、日本語教育の主流の先生方も、数学出身の岩崎先生の（民間からお金を取れる評価を得ている）日本語教育システムから学ぶことも多いはずですし、科学として前進することも可能になるはずだと思っています。

板倉 隆夫 (Tel: 099-286-4221; e-mail: itakura@fish.kagoshima-u.ac.jp)

おわりに

水産学部での日本語教育が始まった1980年代の前半は、鹿屋を基盤とする「からいも交流」が注目を集め、鹿児島県は県をあげて「南の拠点作り」に取り組んでおりました。故安部晋太郎外務大臣が地元出身の藤田氏（当時外務省の国際協力室長、現在国際協力事業団総裁）を連れて来鹿し、城山観光ホテルで「1日外務省」を開き、「これからの外交は外務省だけでやれるものでないの、皆さんのご協力を戴きたい」と1000人の聴衆の前で訴えられました。そして、国際交流は形式の時代から普段着の時代への転換が求められていました。その後、鹿児島大学では、留学生の受け入れに伴う専任者も増え、事務的にはかなりの整備もされました。しかし、担当者はその場その場の忙しさに流され、ピースミールアプローチに終始し、当時持ち越された課題は、今もなお、課題として残されています。

本稿では、途中プログラムに参画いただいた田尻先生、大嶋先生、中島先生、望月先生の投稿はありませんが、水産学部で実施されている日本語教育のビジョンと実態を垣間見ていただけたかと存じます。留学生の大部分が大学院生であり、実用英語プログラムも殆どないという鹿児島大学の特殊事情を鑑み、プロ集団が集まった留学生センターに対する期待は膨らむばかりです。

熊本大学に留学生センターができる以前の1987年に、本学に留学生センター設置の打診がありました。その後、鹿児島大学は動かず、熊本大学からは留学生センター設置についての注意事項を聞きに担当者が来られ、全ての参考資料を持っていかれました。その後、熊本大学に留学生センターが設置されることになりました。鹿児島大学の留学生センター設置はおめでたいことですが、約15年間の遅れを挽回し、更なる発展が期待されています。課題は山積みされています。効果的な日本語の語学センター機能を果たすとともに、各学部・指導教官・留学生担当教官・チューター・事務・ボランティアグループ・留学生への住宅の提供者等とのネットワーク作り、ホストファミリー制度

の確立、保険制度の徹底、ハウジングオフィスの整備等が欠かせません。

伝統的な少人数教育・指導のみならず、学内の人的資源（希少資源ですよ）を生かし、ITも駆使し、留学生担当教官（学部配属されている留学生担当教官は元来、全学的な需要への対応を配慮したもので、もっともっと全学的な貢献ができると存じます。）の活用、多人数の大学院生にも対応できる時代に対応した留学生の受入・日本人学生の派遣体制の確立に努力してほしいと存じます。

松田 恵明（Tel: 099-286-4270; e-mail : matsuda@fish.kagoshima-u.ac.jp）